「技報」の発刊に当って

取締役社長　上前行孝

技報を出したいという社内の声はかなり多く、また、強いものがあった。それは、業務を通じて会得する技術的な経験知識が社内に多く蓄積されているという証左でもある。そして、このような成果は会社にとり貴重な財産であるが、公共事業を通じ知り得たものが殆どであるので、技術情報として世に公開すべき義務もあると考え、その発刊に踏み切ったのである。

一般に、技術者は書くこと、話すことが不得手な方である。従って、もてるものがどんなに貴重なものであっても、発表するということを億劫に思ってしまう。しかし、それを少しでも経験すれば、馴れてくるもので、それ程難しいものではない。要は発表すべきものが技術的に価値あるものであれば、筆はすゝむものである。

今回この技報の発刊は、当社々員に対し以上のような事柄の啓蒙と、社内における技術情報の伝達管理、社会的な貢献という意義がある。

初刊から気張らず、飾ざらず、率直に正しく表現することに重きをおくことを願った。こゝに掲載されている労作は、大学や研究所での研究成果とは自ずと異なるものであることは当然である。技術というものはものを創り出す方法、手段であって、その基礎となる工学的な理論とは異るものである。われわれが日常相対している技術は経済を前提とし、生産的なものでなければならない。従って、学問的であっても、前述の条件が満たされていなければならない。

器用にまとめられた学術論文よりも、われわれが求めている技術的情報が技報の掲載条件である。こゝが学協会の会誌の論文とは異る点である。そして、このことを通じて、何がわれわれにとって価値あるものであるかが解るようになることが大切である。そして、やがて他の文献等をそしゃくする力や評価する能力が備ってくることを願うものである。

まずは、創刊を共に慶びたい。そして、今後、有益な労作が続々と出現するであろうことを切に望みたい。